

The Kalacakra and Tantric Deities Preserved in the Boston Museum of Fine Arts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Mori, Masahide メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001790

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ボストン美術館所蔵「カーラチャクラと諸尊図」

森 雅 秀

The *Kālacakra and Tantric Deities* Preserved in the Boston Museum of Fine Arts

Masahide MORI

1. はじめに

ボストン美術館の「カーラチャクラと諸尊図」(図1、以下「カーラチャクラ図」と略する)は、同館が所蔵するチベット絵画の中でも、とくにすぐれた作品のひとつである。縦横50センチメートルあまりのほぼ正方形のキャンバスに、鉱物性顔料を用いて描かれ、チベットで「タンカ」と呼ばれる軸装の絵画のジャンルに含まれる⁽¹⁾。

本作品は中央にカーラチャクラを大きく描く。カーラチャクラはインド密教の最後期に登場した重要な経典『カーラチャクラ・タントラ』*Kālacakra-tantra* に登場する主要な尊格である。ここでは火炎の光背を伴い、明妃ヴィシユヴァマターを抱擁して立っている。カーラチャクラを描いた部分の四隅には、さらに4尊の尊格が小さく描かれている。カーラチャクラを囲む周囲の区画には、おもに密教の主要な尊格たちが配されている。ただし、上段にはインドやチベットの祖師たちが並び、また最下段の左端には、僧侶と供物がそれぞれ一区画ずつを占めている。

この作品は様式や祖師の姿などから判断して、サキャ派、とくにその中でもゴルと呼ばれる学派に属する作品と考えられる。ゴル派の拠点であった南チベットのツァン地方で、15世紀頃に制作されたと推定される。

この「カーラチャクラ図」は、インドで成立したマンダラ儀軌書『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī* (以下 VA) に関連する作品としても重要である。上段に描かれた尊格と祖師たちは、VA のインドおよびチベットにおける継承者たちの姿を描いたものである。また中央のカーラチャクラを含め、画面の大半を占める密教の尊格たちは、VA に説かれるマンダラの中尊たちの姿である。

VA は後期密教を代表する学僧アバヤーカラグプタ *Abhayākara Gupta* の主著のひとつである。マンダラ観想法を扱う『ニシュパナヨーガーヴァリー』*Niṣpannayogāvalī* (NPY)、護摩の儀軌である『ジュヨーティルマンジャリー』*Jyotirmañjarī* とともに、密教儀軌三部作を構成し、チベットにおいても「環の三部作」(*phreng ba skor gsum*) の名で重視され



図1 ポストン美術館所蔵「カーラチャクラと諸尊図」(Leidy & Thurman 1997: Pl. 29より転載)

た⁴⁴。三つの文献のタイトルに「環」を意味する語が含まれているからである。VAはこの三部作の中心に位置する文献で、きわめて大部のマンダラ儀軌書である。マンダラの制作儀礼と、そのマンダラを用いて行うふたつの儀礼、すなわちアビシェーカとプラティシエターをくわしく解説する。これに加え、護摩やバリなどの基本的な儀礼も扱い、著者アバヤカラグプタが生きた12世紀前半の、インド密教の儀礼の実態を伝える貴重な文献である。

VAに説かれるマンダラは、地面の上に輪郭線を引き、これにしたがって顔料の粉などで描くマンダラである。マンダラに含まれるすべての尊格は、金剛杵や法輪のようなシンボルに置き換えられる。現在、チベット仏教でしばしば制作される砂マンダラと同じであ

る。一方、NPYはこれらのマンダラを観想するための手引き書である。マンダラに含まれる仏たちの具体的なイメージ、たとえば面数、臂数、持物、表情、姿勢、服装、装身具などが細かくあげられている。アバヤーカラグプタの言葉を借りれば、VAには「描かれるマンダラ」(lekhyamaṇḍala)が、NPYには「観想されるマンダラ」(bhāvyamaṇḍala)がそれぞれ説かれている。重要なのは、VAとNPYに説かれているマンダラは、外見は異なっているけれども、まったく同一のマンダラであることである⁽³⁾。

VAとNPYには多くの種類のマンダラが説かれている。それは、著者のアバヤーカラグプタが、当時のインド密教において流通していた主要なマンダラを、これらの文献において網羅したためと考えられる。ただしアバヤーカラグプタは両書の中でマンダラの数をも特定していない。現在出版されているNPYのサンスクリット・テキストは、全体が26の章に分かれているため、アバヤーカラグプタが取り上げたマンダラも26種類とみなされることもある。しかし実際には、マンダラの中尊を変更したり、周囲のメンバーを入れ替えることなどによって、いくつかの章では複数のマンダラが説かれている。そして、その数は42種になるという考え方が、チベットにおいては一般的であった⁽⁴⁾。ボストンの「カーラチャクラ図」に描かれている密教の仏たちは、これらの42種のマンダラの中尊たちである。そして、中心に大きく描かれているカーラチャクラこそ、その最後すなわち42番目に位置する尊格なのである。したがって、本作品の制作者の意図をより忠実に反映させるならば、この作品は「カーラチャクラを中心とする『ヴァジュラーヴァリー』のマンダラの中尊の図」と呼ぶこともできる。

チベットにおいてVAのマンダラの中尊を描いた作品は、このほかにもいくつか知られている。この小論では、ボストン美術館の作例について、その概要を詳説し、VAとの関係を明らかにした上で、VAと関連するそのような作品との比較を通して、本作品のもつ意義について考察を加える。

2. 作品の概要

全体

「カーラチャクラ図」は縦53.3cm、横51.4cmの大きさを持つほぼ正方形のキャンバスに描かれている。全体は赤い色調が支配的であるが、尊格の色に濃紺、薄紺、黄色、白(クリーム色がかっている)、朱色などの色彩が用いられている。各尊や人物像の光背はいずれも赤であるが、祖師や一部の尊格には、光背の内側に緑色の部分を作っている。背景は濃い紺色で、中央のカーラチャクラの区画の周囲と、作品全体を取り囲むように、黄色い二重の枠がおかれている。作品の縁の部分も赤く塗られている。

本作品はボストン美術館では67-821という登録番号を持ち、1967年にJ. ガレット Goelet

によって同館に寄贈された。梅尾（1986）によれば、ガレットは東洋美術の著名な蒐集家で、ボストン美術館のすぐれた東洋美術のコレクションの形成に大きく貢献したことで知られている。1964年には同館のイスラム美術の研究員（Reserch Fellow）に、1966年には理事に選出されている。チベット美術の収集に際して、ガレットはゴル派を中心とするサキヤ派の絵画をとくに好んで購入したという。ゴル派は1429年にチベット南部のツァン地方に、サキヤ派のゴルチェン・クンガ・サンポ Ngor chen Kun dga' bzang po がゴル Ngor 寺（エーヴァムEvam 寺とも呼ばれる）を創建したことに始まる。クンガ・サンポはこの寺院の建立に際し、ネパールから多くの画工を招き、壁画や絵画の制作にあたらせ、その結果、チベット絵画にインド、ネパールの要素を色濃く示す洋式が生まれた⁽⁵⁾。後述するように本作品にもネパール的な雰囲気は顕著に認められる。なお、梅尾がボストン美術館のコレクションから厳選した『ネパール、チベット仏教絵画集』（1986）には、本作品を含めガレットの蒐集した作品20点が含まれているが、その大半がゴル派に属する作品であると梅尾は見ている。

カーラチャクラ父母仏

本作品の中心を占めるカーラチャクラ父母仏は、文献の規定に忠実に描かれている⁽⁶⁾。男尊のカーラチャクラは四面二十四臂をそなえる。顔の色は中央は青、右は赤、左は白、後ろが黄色（絵では左面のさらに外側に描く）で、腕の色は四組ずつ塗り分けられ、下から順に青、赤、白である。これらの腕にはさまざまな持物を持つが、主要な二臂は金剛杵と金剛鈴を左右の手に持ち、明妃を抱擁している。カーラチャクラの身色の独特な点は、首の色と左右の足の色も塗り分けられていることである。首は青、赤、白の三色に、また、右足は赤、左足は白である。左右の足の下にはヒンドゥー教の神が踏みつけられ、右足の下にはカーマが、左足の下にはルドラがそれぞれ横たわり、そのかたわらには各尊の配偶神が、足下の男神に取りすがっている。

明妃のヴィシュヴァマターは、男尊と交接状態にあり、カーラチャクラが展右の姿勢をとるため、これに沿うように展左のポーズをとる。明妃の身色は黄金色一色であるが、四面の顔のうちの二面は白と青で塗られているのがわかる。八臂のうちの左の一臂は男尊の首にまわし、残りの手にはそれぞれ異なる持物を持つ。

カーラチャクラの頭部には宝冠が飾られ、その中央には阿閼の姿がある。阿閼はカーラチャクラの属する部族の部族主である。頭頂には羯磨杵と三日月を飾るが、これはチャクラサンヴァラとも共通する装飾品である。大きな丸い耳飾り、豪華な臂釧、腕釧、足環などを男女尊とも身につけ、腰からは手の込んだ連珠の腰飾りを周囲に垂らしている。カーラチャクラは虎の皮で作った腰巻きも付け、両足の間からその一部がのぞく。

正面を向いたカーラチャクラの中央面は、やや丸顔で、誇張気味に丸く見開いた目が左

右と額にさらにひとつ、合計三つあり、左右の目の上には山形の赤い眉毛が描かれている。口元を上につりあげ、牙を少しのぞかせた口のまわりには、眉毛と同じような表現でひげも描かれている。顔の全体からは忿怒というよりはコミカルな印象を受ける。しかし、この中央面の左右に連なる三つの面は、細く切れ長の目につり上がった細い眉、鉤型の鋭い鼻梁、顔と同じ色の薄い唇を持ち、一転して伶俐な印象を与える。

一方のヴィシュヴァマターは、中心となる面もほぼ横顔で表され、男尊を上目遣いに見る両目は、赤いはっきりとしたくまどりがあり、半開きにして歯を見せる口元にはほほえみを浮かべているようにも見える。

両尊の背後には火炎の光背が大きく表され、美しい草状の文様が全体を覆っている。火炎の周囲は花卉を並べたような形で火炎を表し、内側と同じ文様を黒と赤のコントラストで描くことによって、燃えさかる炎を典型的に表現している。

光背の背景は濃い紺色で塗られているが、よく見ると、人骨が散乱している様子が、白と赤の絵の具で細かく書き加えられている。上の方ではその骨をついばむ二羽の水鳥(?)の姿が認められる。類似の人骨の表現は、同じボストン美術館所蔵のヘーヴァジュラ・マンドラの八屍林の部分にもあり、墓場の情景を表したものであろう⁽⁷⁾。

カーラチャクラの台座は下向きの緑色の蓮弁が九枚描かれ、台座の表面には赤地に渦巻状のつる草をオレンジ色で描いている。蓮弁の部分は同系色の濃淡を変えて、たくみに立体感を表している。

カーラチャクラ父母仏が描かれている区画には、四隅に小さく四尊の守護尊がいる。左上にはヤマータカ（ヴァジュラバイラヴァ）、右上には一六臂のヘーヴァジュラ、左下には赤色のヤマール、すなわちラクタ・ヤマール、右下には大輪金剛手(マハーチャクラ・ヴァジュラパーニ)である。ヤマール以外はいずれも紺色の身色である。

周囲の区画

カーラチャクラ父母仏の周囲は小さな区画に分けられている。上端には10の区画が横一列に並び、下端には横に九つの区画が上下二段になっている。左右にはそれぞれ横に二つ、縦に七つの区画があり、これらを合計すると56になる。

このうち、上端の向かって左の四つの区画については、作品の背面に銘文があり、左から順に持金剛 Vajradhara、金剛瑜伽女 Vajrayoginī、アバヤーカラグプタ Abhayākaragupta、アナヤカパ Anayakapa (?) であることが、読みとれるという⁽⁸⁾。はじめの二尊は絵柄からもわかるように密教の尊格であるが、アバヤーカラグプタとされる第三の人物から後の上段の人物と、二段目の左からふたりは僧形をとる。このうち、はじめの4人は頭巾をかぶり、左肩をあらわにしたインド風の僧衣を付ける。それぞれが異なる持物を持っている。5番目の人物は、同じような頭巾をかぶるが、僧衣の上に金色の模様の付いたローブを掛

ける。残りの五人の人物はいずれも無帽で、同様のローブをまとい、チベットの僧侶であることを表している。五人はすべて両手を胸の前においたよく似た印を示し、顔の表情や体つきにも変化は乏しい。特定の人物に比定できるだけの特徴をそなえていない。

下段の左端にもこれらのチベット人僧侶によく似た人物が描かれている。左手には香炉を持っているようで、左隣の区画に描かれた供物の方を向いてすわる。チベットのタンカにおいて最下端のこのような領域は、作品の依頼主や保持者が自分の姿を投影する場面であることが多く、作品に描かれた諸尊や祖師たちに礼拝や供養を行う姿と考えられる。

これらの14の区画を除いた42の部分には、それぞれ一尊ずつ密教の仏たちが描かれている。これらがVAのマンダラの主尊たちである（当然NPYのマンダラの中尊でもある）。ただし、下端の左から三つ目と四つ目の2尊は、VAのマンダラとは関係を持たない尊格で、左から順にヴィナーヤカに乗ったマハーカーラと、獅子に乗る毘沙門天に比定できる。マハーカーラのような護法尊や、毘沙門天のような財宝神を作品の下の端の部分に描くことも、チベットのタンカできわめて一般的である。

3. 『ヴァジュラーヴァリー』との関係

中央のカーラチャクラを含め、本作品の大半を占めているのはVAのマンダラの中尊たちである。すでに述べたように、NPYは26の章に分かれ、VAの中でもこれと同じ順序でマンダラが説明されているが、全体で説かれているマンダラの種類は、合計すると42になる。VAとNPYに説かれるマンダラを、文献に登場する順に列挙すると次のようになる。各行のはじめの番号は42種のマンダラの通し番号、つぎの番号は26種として数えた場合の番号である。

1	1	Mañjuvajraṃḍala
2	2	Piṇḍīkramoktākṣobhyaṃḍala
3	3	Śrīsamputāntroktavajrasattvaṃḍala
4	4	Jñānaḍākinīṃḍala
5	5	Saptadaśātmakahevajraṃḍala : Garbhahevajraṃḍala
6		Cittahevajraṃḍala
7		Vākhevajraṃḍala
8		Kāyahevajraṃḍala
9	6	Nairātmyāṃḍala (23尊マンダラ)
10		Nairātmyāṃḍala (15尊マンダラ)
11		Kurukullāṃḍala

12	7	Vajrāmṛtamaṇḍala
13		Vajrahūṃkāramaṇḍala
14		Vajraherukamaṇḍala
15		Amṛtakunḍalinmaṇḍala
16	8	Navātmakahevajracatuṣṭayamaṇḍala : Garbhahevajramaṇḍala
17		Cittahevajramaṇḍala
18		Vākhevajramaṇḍala
19		Kāyahevajramaṇḍala
20	9	Mahāmāyāmaṇḍala
21	10	Buddhakaṇḍalamaṇḍala
22	11	Vajrahūṃkāramaṇḍala
23	12	Samvaramaṇḍala (四面十二臂)
24		Cakrasamvaramaṇḍala (一面二臂)
25		Cakrasamvaramaṇḍala (一面二臂)
26		Vajravārāhīmaṇḍala (身色は赤)
27		Vajravārāhīmaṇḍala (身色は青)
28		Vajravārāhīmaṇḍala (身色は黄)
29	13	Buddhakaṇḍalamaṇḍala
30	14	Yogāmbaramaṇḍala
31	15	Yamārimaṇḍala
32	16	Vajratārāmaṇḍala
33	17	Māricīmaṇḍala
34	18	Pañcarakṣāmaṇḍala
35	19	Vajradhātumaṇḍala
36	20	Tricatvāriṃśadātmakamañjuvajramaṇḍala
37	21	Dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍala
38	22	Durgatipariśodhanamaṇḍala
39	23	Bhūtaḍāmaramaṇḍala
40	24	Pañcaḍākamaṇḍala
41	25	Ṣaṭcakravartīmaṇḍala
42	26	Kālacakramaṇḍala

この42種のマンダラの中尊が、「カラーチャクラ図」のどこに描かれているかを示したのが図2である。図中の数字は、リストの42の番号にも対応している。これを見ると、42

図2 「カーラチャクラと諸尊図」配置図

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J			
K	L	M					16	19	18			
2	1									17	20	
4	3									21	22	
7	8					42					24	23
6	5									26	25	
10	9	N				O		27	28			
12	11									29	30	
13	14	15	41	40	39	36	32	31				
S	R	Q	P	38	37	35	34	33				

- | | | | | | |
|----|-------------------------|----|--------------------------------------|-------|---------------------|
| 1 | Mañjuvajra | 21 | Buddhakapāla | 39 | Bhūtaḍāmara |
| 2 | Akṣobhya | 22 | Vajrahūṃkāra | 40 | Hevajra |
| 3 | Vajrasattva | 23 | Saṃvara | 41 | Vajrasattva |
| 4 | Jñānaḍākīnī | 24 | Cakrasaṃvara | 42 | Kālacakra |
| 5 | Hevajra (Garbhahevajra) | 25 | Cakrasaṃvara | A | Vajradhara |
| 6 | Hevajra (Cittahevajra) | 26 | Vajravārāhī | B | Vajrayoginī |
| 7 | Hevajra (Vākhevajra) | 27 | Vajravārāhī | C | Abhayākaragupta |
| 8 | Hevajra (Kāyahevajra) | 28 | Vajravārāhī | D | Nāyakapa |
| 9 | Nairātmyā | 29 | Buddhakapāla | E F | unidentified monk |
| 10 | Nairātmyā | 30 | Yogāmbara | G | Śākyaśrībhadra (?) |
| 11 | Kurukullā | 31 | Yamāri | H ~ L | unidentified monk |
| 12 | Vajrāmṛta | 32 | Vajratārā | M | Vajrabhairava |
| 13 | Vajrahūṃkāra | 33 | Māricī | N | Raktayamāri |
| 14 | Vajraheruka | 34 | Mahāpratisarā | O | Mahācakra Vajrapāṇi |
| 15 | Amṛtakuṇḍalin | 35 | Vairocana | P | Vaiśravaṇa |
| 16 | Hevajra (Garbhahevajra) | 36 | Mañjuvajra | Q | Mahākāla |
| 17 | Hevajra (Cittahevajra) | 37 | Dharmadhātuvāgīśvara
(Mañjughoṣa) | R | offering |
| 18 | Hevajra (Vākhevajra) | 38 | Durgatipariśodhana
(Śākyasiṃha) | S | unidentified monk |
| 19 | Hevajra (Kāyahevajra) | | | | |
| 20 | Mahāmāyā | | | | |

の尊格たちは、無秩序に配されているのではなく、ある程度、一貫性をもって並べられていることがわかる。すなわち、左上からはじまり、左の2列を原則として上から下に降り、15に至り、次は右上に移る。16番目のヘーヴァジュラは、周囲の区画ではなく、カーラチャクラの右上に置かれているが、これに17番目の4臂のヘーヴァジュラ以下が連続している。右側の2列も、一部上下が逆に進むことはあるが、原則として下に向かって進み、右下の隅の33で左に向きを変え、下の二段を上下しながら進み、41にいたる。42番目のカーラチャクラは、タンカの中央に大きく描かれた父母仏そのものである。

このように、42の尊格の配列は、中央のカーラチャクラの周囲を、左辺、右辺、下辺の順に埋めるように進んでいる。その動きは単純に右から左、上から下というものではなく、斜めに進んだり、場合によっては下から上に戻ることもあるが、連続する二つの尊格は、わずかな例外を除いて、つねにどこかを接する区画に置かれている。これらの尊格の配置を考えた者が、VA や NPY のマンダラの順序を意識していたことは確実である。

VA や NPY で最後に説かれるカーラチャクラが中央に大きく描かれる尊として選ばれているのも、アバヤーカラグプタの意図を反映しているのであろう。カーラチャクラやそのマンダラを説く『カーラチャクラ・タントラ』は、インド密教史の最後に登場した重要な経典である。アバヤーカラグプタがこのマンダラを VA や NPY において最後に取り上げているのは、このマンダラがそれ以外のマンダラとは異なる、独自の形態や体系をそなえていたためと考えられる。さらにアバヤーカラグプタが VA の中で説くアビシェーカやプラティシューターの方法が、『カーラチャクラ・タントラ』の体系に大きく依拠していたこともあげられる⁽⁹⁾。アバヤーカラグプタにとってカーラチャクラ・マンダラは、他のマンダラとは異なる特別な重要性をもったマンダラだったのである。

「カーラチャクラ図」の中に描かれる42のマンダラの中尊たちの姿は、NPY が説くマンダラ観想法の中での各尊の図像的特徴に、ほぼ忠実に従っている。面数、臂数、身色、持物、坐法、台座なども、ほとんどが NPY 中の記述にもとづいている。さらに、尊容以外の情報も組み込まれている。たとえば、右下にいるマーリーチャー (33) とマンジュヴァジュラ (36) は、他の尊とは異なり、光背の周囲が白く縁どられ、上端にはチャイトヤが小さく描かれている。NPY によれば、これら2尊はチャイトヤの中に住しているという⁽¹⁰⁾。

ヴァジュラフーンカーラ (13)、ヴァジュラヘルカ (14)、アムリタクンダリン (15) の3尊について、NPY はくわしく述べず、典拠となる『金剛甘露タントラ』を参照するよう指示する⁽¹¹⁾。同経の中にはこれら3尊についての簡単な記述がある⁽¹²⁾。「カーラチャクラ図」でこの3尊を描いた者が、経典の記述以外にどのような情報源を有していたのかは不明であるが、この3尊のみは NPY に尊容の典拠が求められず、他の尊格たちとは異なる条件のもとで描かれていることは注意を要する。

作品の上段におかれている2尊と祖師たちについても簡単にふれておこう。タンカの上段にはしばしば、タンカの主題となる尊格やマンダラなどの血脈、すなわち伝承者が描かれる。ここでもインドからチベットへといたるVAの伝承者たちの姿が、順に並ぶと考えられる。

チベット人の著作に現れるVAの血脈には、次のようなものがある。

プトン「聴聞録」(The Collected Works of Bu-ston, part 26 (LA), ff.82.4-83.1)

1. Vajradhara, Vajrayoginī, Abhayākara Gupta, Nāyakapa, Daśabalaśrī, Vikhyātadeva, Kha che Śākyaśrībhadrā, Bhūmiśrī, Vimalaśrī, Lo tsa ba Grags pa rgyal mtshan, Dus 'khor ba Shes rab seng ge, Bla ma dPal ldan pa

2. (Kha che Śākyaśrībhadrā までは同じ) Glan bad so ba, gNyags rdo rje 'dzin pa, Khams pa dkon mchog rin chen, Lo tsa ba mChog ldan, Bla ma dPal ldan pa

3. Vajradhara, Dākinī, Abhaya(ākara Gupta), Legs spyod 'byung gnas sbas pa, Nyer spyod 'byung sbas pa, Ratnarakṣita, Zhang lo tsa ba Grub pa dPal, Khams pa Śākya rdo rje, dBus pa sangs rgyas 'bum, Lo tsa ba mChog ldan, Bla ma dPal ldan pa

ツォンカパ「聴聞録」(TTP, No. 6138, Vol. 152, 151.5.6-152.1.1)

Vajradhara, Vajrayoginī, Abhayākara Gupta, Nāyakapa, Daśabalaśrī, Vikhyātadeva, Kha che pañ chen, Bhūmiśrī, Vimalaśrī, Lo tsa ba Grags [pa] rgyal [mtshan], Bla ma shes [rab] seng [ge], Bla ma 'jam dbyangs chos kyī brtson 'grus, Bla ma Chos kyī dPal

『テプテルゴンポ』(Roerich 1976: 801)

Vajradhara, Vajrayoginī (Vajravārāhī), Abhayākara (Gupta), Nāyakapāda, sTobs bcu dPal, Vikhyātadeva, Śrībhadrā, Lalitavajra, Dharmagupta, Ratnākara, Padmavajra, Ratnakīrti, Buddhaghosa, Vanaratna

いずれも持金剛をはじめとし、金剛瑜伽女からアバヤーカラグプタがその教えを聞いたと伝えられる。このエピソードは、血脈のひとつを伝える『テプテルゴンポ』にもくわしく述べられているし⁽¹³⁾、三部作のひとつ『ジュヨーティルマンジャリー』のコロフォンにも、アバヤーカラグプタは金剛瑜伽女の加持によって著述したと記されている⁽¹⁴⁾。

作品の背面の銘文のうち、3人目まではこれらの血脈に一致する。第4の銘文の「アナヤカパ」はナーヤカパ(ナーヤカパーダ)におそらく相当する。5番目以降は銘文がないが、7番目の人物がインド風の僧衣とチベットのローブをまとっている点が注目される。血脈の中で7番目にしばしば登場するシャーキャシュリーバドラーは、インドからチベットに逃れ、その地にVAの灌頂作法を伝えたことが知られている⁽¹⁵⁾。両国の要素をかねそなえた風貌のこの人物が、シャーキャシュリーバドラーを表している可能性は高い。

残りの人物は銘文もなく、弁別するだけの特徴的な要素を伴わないため、比定は困難である。僧衣の文様や無帽の頭部の表現などは、サキヤ派の祖師像に見られる人物像と共通し、サキヤ派の中でVAを伝えた祖師たちを表していると推測される⁽¹⁶⁾。このことは、チベットにおいてシャーキャシュリーバドラから聴聞した人物の中に、サキヤ・パンディタのように後世、サキヤ派において有力な人物となる者が含まれていることも関係するかもしれない⁽¹⁷⁾。

4. チベットにおける『ヴァジュラーヴァリー』の作例

ゴル寺のマンダラ集

VAに説かれるマンダラを実際にタンカに描いた貴重な作例として、ゴル寺のマンダラ集がある⁽¹⁸⁾。これはゴル派の開祖であるクンガ・サンポが、その師ササン・パクパ Sa bzang 'phags paの追善のために、ネパールの絵師たちを招聘して、制作にあたらせた作品である。クンガ・サンポがゴル寺を創建したとき、その堂内を飾るために描かせたとも伝えられている。

ネパール人の絵師たちによるこの作品は、丸みを帯びた人体表現、明確なくまどり、装身具や衣装の表現方法などにネパール様式が、当然のことながら色濃く現れている。背景に赤い色をしばしば用いる点も特徴的である。クンガ・サンポの存命時の15世紀前半に制作年代が確定できるため、チベット絵画のゴル派の基準作としても、きわめて重要な作品である。ボストン美術館の「カーラチャクラ図」とも様式の上で共通点は多いが、作風や技術のレベルは、それよりもさらに上に位置づけられる。

ゴル寺のマンダラ集の全体は14枚のタンカで構成され、これらに合計45種のマンダラが描かれていたと推測される。42種ではなく45種であるのは、VAと密接な関係を持った儀軌書『阿闍梨所作集』*Ācāryakriyāsamuccaya*から3種のマンダラが加えられているからである。『阿闍梨所作集』はVAなどの3部作をベースに、さらにさまざまな儀軌を加えて作られた文献で、そのチベットへの導入にはササン・パクパが貢献したことが知られている。45種のマンダラを14枚のタンカに描くため、いくつかのタンカは4種のマンダラを1枚におさめ、さらに5枚のマンダラを描いた作品が1点あったと予想される。14点のうち8点は現存していることが確認されており、さらにその流れを汲むと考えられる作品が3点ある。これらを含め、ゴル寺のマンダラ集の全体像を示すと次頁のようになる。

このゴル寺のマンダラ集に見られるマンダラの配列は、VAで説かれる順序とはまったく異なるものである。このあらたな順序は、マンダラの属するタントラの階梯にしたがい、さらに典拠となる経典にも配慮したものである。すなわち、Iは無上ヨーガの父タントラ、IIからXIは同じ無上ヨーガの母タントラである。その内容はさらに、同一の尊格のマン

No.	タントラの階梯			マンダラ
I	無上ヨーガ (父)	1	1	Mañjuvajramaṇḍala
		36	20	Tricatvāriṃśadātmakamañjuvajramaṇḍala
		2	2	Piṇḍīkramoktākṣobhyamaṇḍala
		31	15	Yamāriṃśadātmakamañjuvajramaṇḍala
II	無上ヨーガ (母)	16	8	Garbhahevajramaṇḍala (十六臂)
		17		Cittahevajramaṇḍala
		18		Vākhevajramaṇḍala
		19		Kāyahevajramaṇḍala
III*	無上ヨーガ (母)	40	24	Pañcaśākhamaṇḍala
IV*	無上ヨーガ (母)	9	6	Nairātmyāmaṇḍala (23尊)
		10		Nairātmyāmaṇḍala (15尊)
		11		Kurukullāmaṇḍala
		32	16	Vajratārāmaṇḍala
V	無上ヨーガ (母)	5	5	Garbhahevajramaṇḍala (十六臂)
		6		Cittahevajramaṇḍala
		7		Vākhevajramaṇḍala
		8		Kāyahevajramaṇḍala
VI*	無上ヨーガ (母)	3	3	Śrīsamputatantroktavajrasattvamaṇḍala
		23	12	Samvaramaṇḍala (四面十二臂)
		24		Cakrasamvaramaṇḍala (一面二臂)
		25		Cakrasamvaramaṇḍala (一面二臂)
VII	無上ヨーガ (母)	26		Vajravārāhīmaṇḍala (身色は赤)
		27		Vajravārāhīmaṇḍala (身色は青)
		28		Vajravārāhīmaṇḍala (身色は黄)
		22	11	Vajrahūṃkāramaṇḍala
VIII	無上ヨーガ (母)	41	25	Ṣaṭcakravartīmaṇḍala
IX	無上ヨーガ (母)	12	7	Vajrāmṛtamaṇḍala
		13		Vajrahūṃkāramaṇḍala
		14		Vajraherukamaṇḍala
		15		Amṛtakūṇḍalinmaṇḍala
		29	13	Buddhakaṇḍalinmaṇḍala
X*	無上ヨーガ (母)	21	10	Buddhakaṇḍalinmaṇḍala
		20	9	Mahāmāyāmaṇḍala
		30	14	Yogāmbaramaṇḍala
		4	4	Jñānaśākhīmaṇḍala
XI*	無上ヨーガ (母)	42	26	Kālacakramaṇḍala
XII*	ヨーガ・タントラ	37	21	Dharmadhātuvāgīśvaraṇḍala
XIII	ヨーガと所作タントラ	35	19	Vajradhātumaṇḍala
		38	22	Durgatiparīśodhanaṇḍala
		39	23	Bhūtaśākhīmaṇḍala
		33	17	Māricīmaṇḍala
XIV	所作タントラ (以下の3点は『阿闍梨所作集』より)	34	18	Pañcarakṣāmaṇḍala
		43		Vasudhārāmaṇḍala
		44		Grahamātrkāmaṇḍala
		45		Uṣṇīṣavijayāmaṇḍala

*は現存が確認されていない作品。ただし、III, XI, XII はオリジナルとは制作時期の異なる作品がある。各マンダラ名の前の数字はすでに示したものに対応する

ダラ (II, V)、同一の經典に説かれるマンダラ (IX)、中尊どうしが密接な関係にあるマンダラ (IV, VII) などとなっている。XII はヨーガ・タントラの大規模なマンダラである法界自在マンダラが単独で描かれ、XIII はヨーガ・タントラと所作タントラのマンダラを2種ずつ組み合わせ、最後の XIV は『阿闍梨所作集』の3種のマンダラを加えた4種で、すべて所作タントラに属する。

14点のタンカのうち、III、VIII、XI、XIIの4点は、ひとつのマンダラを1枚のタンカに描いている。これは、おそらくこれら4種のマンダラが、いずれも大規模なマンダラであることによるのであろう。あるいは、IIIは5種、VIIIは6種のマンダラを組み合わせ、XIは三重、XIIは四重の同心円で構成されるという、複合的な構造をとるマンダラであるためと考えられる。ひとつのマンダラの中にすでに複数のマンダラをそなえているのである。

ゴル寺のマンダラ集に見られるこのような順序は、VAやNPYを著したアバヤーカラグプタの意図するものではなかった。VAやNPYの中に、複数のマンダラをそれぞれが属する階梯にしたがって配列し直すという考え方は、まったく認められない。アバヤーカラグプタはおそらく、マンダラの物理的な形態の共通性に着目して、マンダラの順序を決めていた⁽¹⁹⁾。これはマンダラの輪郭線を描く方法を説く、VAの「墨打ちの儀軌」での説明の簡便性を優先させたものと考えられる。VAの中で説かれるアビシェーカやプラティシュターは、いかなるマンダラを用いて行なっても、原則として同一の方法であったため、マンダラの主尊、マンダラが属するタントラの階梯、典拠となる經典などに配慮する必要はなかったのである。

『五百尊図像集』

ゴル寺のマンダラ集とも密接な関係を持ち、VAを典拠とする作例に『五百尊図像集』がある。正式名称は *Rin 'byung mar thang brgya rtsa rdor 'phreng bcas nas gsungs pa'i bris sku mthong ba don ldan* といい、『ナルタンの五百尊』という名称でも知られている。Pander (1890) や Grünwedel (1970) によって紹介され、Clark (1937) がチベット密教図像資料のひとつとして活用したことで、存在価値が高まった。全体は Lokesh Chandra (1986) や Tachikawa *et. al.* (1995) によって刊行され、近年では彩色版が詳細な解説と研究とともに出版され、注目を集めている⁽²⁰⁾。本来は木版本で、それをもとにした白描集も残されているが、後者は誤りが多く認められる。彩色版は木版本に彩色をほどこしたものと推測されている。

『五百尊図像集』は、パンチェンラマ4世 (1782–1853) の撰になると伝えられている。各葉は表の面に横に三尊の尊格の白描を並べ、裏面にマントラが記されている。全体はリンジュン、ナルタン、ドルテンの三つの部分に分かれる。はじめのふたつはターラナータ

の *Yi dam rgya mtsho'i sgrub thabs rin chen 'byung gnas* およびパンチェン4世によるその注
 釈書 *Yi dam rgya mtsho'i sgrub thabs rin chen 'byung gnas kyi lhan thabs rin 'byung don gsal*
 (*Rin lhan*) にもとづき、ドルテンの部分はチャンキャ1世(在1688–1690)の *rDzogs*
'phreng dang rdor 'phreng gnyis kyi cho ga phyag len gyi rim pa lag tu blangs bde bar dgod pa
 が典拠であると考えられている。

ドルテンはVAのチベット名 *rdo rje 'phreng ba* の略称で、VAに説かれるマンダラの中
 尊がこの部分に集められている。その内容は以下の通りである。

No.	Tib.	Skt. etc.
453 (D 1 a)	gSang 'dus 'jam rdor	Guhyasamāja Mañjuvajra
454 (D 1 b)	rNam snang 'jam rdor	Vairocana Mañjuvajra
455 (D 1 c)	gSang 'dus mi bskyod pa	Guhyasamāja Akṣobhya
456 (D 2 a)	dGra nag gshin rje gshed	Kṛṣṇāri Yamāntaka
457 (D 2 b)	sNying po kyai rdor	sNying po Hevajra
458 (D 2 c)	Thugs kyai rdor	Citta Hevajra
459 (D 3 a)	gSung kyai rdor	Vāg Hevajra
460 (D 3 b)	sKu kyai rdor	Kāya Hevajra
461 (D 3 c)	rDo rje mkha' 'gro	Vajradāka
462 (D 4 a)	rDo rje bdag med ma	Vajranairātmyā
463 (D 4 b)	rDo rje bdag med phyag gnyis ma	Two-armed Vajranairātmyā
464 (D 4 c)	Ku ru ku le	Kurukullā
465 (D 5 a)	rDo rje sgrol ma	Vajratārā
466 (D 5 b)	Kyai rdor	Hevajra
467 (D 5 c)	Thugs kyai rdor	Citta Hevajra
468* (D 6 a)	gSung kyai rdor	Vāg Hevajra
469* (D 6 b)	sKu kyai rdor	Kāya Hevajra
470* (D 6 c)	bDe mchog rdo rje sems dpa'	Vajrasattva Saṃvara
471 (D 7 a)	bDe mchog	Saṃvara
472 (D 7 b)	bDe mchog phyag gnyis	Two-armed Saṃvara
473 (D 7 c)	'Khor lo sdom pa ser po	Pīta Cakrasaṃvara
474 (D 8 a)	Phag mo dmar mo	Rakta Vārāhī
475 (D 8 b)	Phag mo sngon mo	Nīla Vārāhī
476 (D 8 c)	Phag mo ser mo	Pīta Vārāhī
477 (D 9 a)	Khro bo hūṃ mdzad	Krodhahūmkāra

478 (D 9 b)	rDo rje sems dpa'	Vajrasattva
479 (D 9 c)	rNam par snang mdzad	Vairocana
480 (D10a)	Rin 'byung	Ratnasambhava
481 (D10b)	sNang mtha'	Amitābha
482 (D10c)	Mi bskyod pa	Akṣobhya
483 (D11a)	Don yod grub pa	Amoghasiddhi
484 (D11b)	rDo rje bdud rtsi	Vajrāmṛta
485 (D11c)	rDo rje hūṃ mdzad	Vajrahūṃkāra
486 (D12a)	Khrag 'thung	Heruka
487 (D12b)	bDud rtsi 'khyil ba	Amṛtakuṇḍalin
488 (D12c)	Sangs rgyas thod pa	Buddhakaṇḍala
489 (D13a)	Sangs rgyas thod pa	Buddhakaṇḍala
490 (D13b)	Ma hā ma ya	Mahāmāyā
491 (D13c)	rNal 'byor nam mkha'	Yogāmbara
492 (D14a)	Ye shes mkha' 'gro	Jñānaḍākinī
493 (D14b)	Dus 'khor	Kālacakra
494 (D14c)	sNang mdzad rdor dbyings	Vajradhātu Vairocana
495 (D15a)	Shākya seng ge	Śākyasiṃha
496 (D15b)	Chos dbyings gsung dbang	Dharmadhātuvāgīśvara
497 (D15c)	'Byung po 'dul byed	Bhūtaḍāmara
498 (D16a)	'Od zer can ma	Māricī
499 (D16b)	So sor 'brang ma	Pratisarā
500 (D16c)	Nor rgyun ma	Vasudhārā
501 (D17a)	gZa' yum rig pa chen mo	Grahamātrkā Mahāvidyā
502 (D17b)	rNam rgyal ma	Vijayā
503 (D17c)	rGyan drug phyag mtshan	Ṣaḍābharāṇa

*左端の番号は Tachikawa *et. al.* (1995) にしたがう。

一見してわかるように、これはゴル寺のマンドラの集の順序に正確に一致している。典拠となる文献はチャンキヤの儀軌であるが、配列はチャンキヤが考案したものではなく、クンガ・サンポにまでさかのぼることは明らかである。チャンキヤの儀軌の内容はマンドラの各尊の観想法を説き、NPY と重なる部分も多い。チャンキヤ自身、これらの情報はクンガ・サンポやその師ササン・パクパにまでさかのぼることを、同書の中で示している。

『五百尊図像集』に描かれている諸尊は、19世紀前半という制作年代や、ゲルク派の伝統に属すること、オリジナルが木版画であることなどから、「カーラチャクラ図」やゴル寺のマンドラ集とは作風が大きく異なる。当然、ネパールのな雰囲気は払拭されている。

各尊の図像上の特徴を、ボストン美術館の「カーラチャクラ図」と『五百尊図像集』とで比べてみると、たとえば表1のような相違点が認められる。

このほか、NPYに尊容が明記されない『金剛甘露タントラ』の3種のマンドラは、両作品の間で尊容が大きく異なる(図3)。

このような相違点のうち、台座の獅子や周囲のチャイトヤなどは、NPYに規定されたものが『五百尊図像集』では表現されていないが、逆に7bから8cまでの5尊の持物は『五百尊図像集』のものがNPYに一致する。また『金剛甘露タントラ』の3尊のように、NPYに明記されていないものが両者の間で異なるケースも多い。このような場合、それぞれがもつた図像上の典拠が何であるかは、現時点では明らかではないが、両者が異なる系統に属することは確認できる。

5. おわりに

ボストン美術館の「カーラチャクラ図」は、すでに二種の出版物において刊行されている。ひとつは梶尾(1986)で、もうひとつはLeidy & Thurman(1997)である。いずれに

表1 ボストン美術館所蔵「カーラチャクラ図」と『五百尊図像集』の相違点

fol. No.	「カーラチャクラ図」	『五百尊図像集』
1b	チャイトヤの中に住し、獅子に乗る	チャイトヤも獅子も描かれていない
2c3a3b	女尊の右手の持物が無い	女尊は右手を高く掲げ、カルトリを持つ
6c	半跏で踊る	結跏趺坐を組む
15c	四臂のガネーシャを踏みつける	人間(?)を踏みつける
7b7c	女尊の右手の持物がカルトリ	女尊の右手の持物が金剛杵
8a8b8c	右手にカルトリを持ち、左手にカトヴァーンガをかかえる	右手に金剛杵を持つ。カトヴァーンガはない
13c	獅子に乗る。女尊は六臂をそなえる	獅子は表されない。女尊は二臂をそなえる
14c	獅子に乗る	獅子は表されない
16a	台座に7頭の猪を整然と並べる。チャイトヤの中に住する	台座に猪を一頭のみ大きく描き、その周囲に小さな猪を7頭描く。チャイトヤは表されない

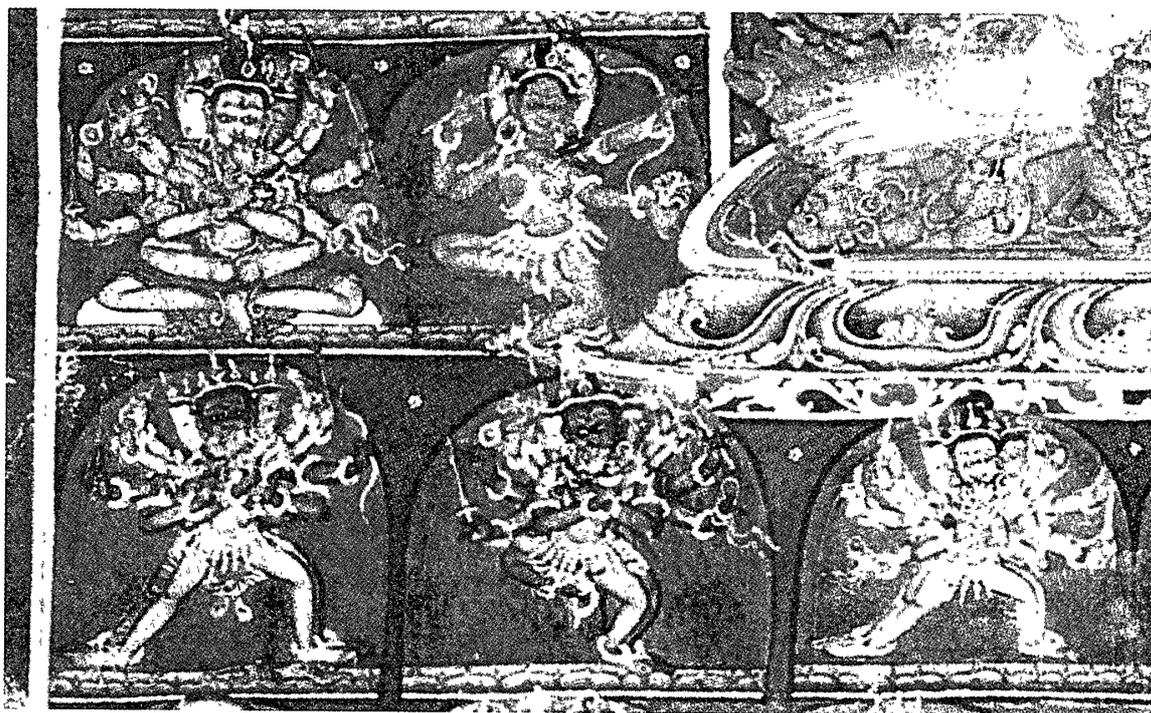


図3 『金剛甘露タントラ』所説の3尊（上図は「カーラチャクラ図」で、下段左より Vajrahūmkāra, Vajraheruka, Amṛtakuṇḍalin. 下図は『五百尊図像集』左より同じ順の3尊）

も同作品の原色図版が含まれている。

このうち、梅尾は、作品の背面にある銘文を紹介した上で、各尊の図像的な特徴を詳細に記述している。しかも彼はこの作品がVAと密接な関係を有することに気づき、『五百尊図像集』の「ドルテン」の部分とおもに対照させることで、各尊を比定している。一部の尊の比定に誤りがあるが、ほとんどは正確な尊名が与えられていることは、高く評価される。しかし、梅尾自身はVAとNPYのくわしい内容や両者の関係についての知識は十分ではなかったようで、VAをNPYの「より詳細な解説」とみなしている。また『五百尊図像集』と本作品との配列の相違には注意を払わず、この作品がVAやNPYの順序に

忠実であることを意識しないまま、無作為に各尊に番号を与えて解説を進めている。

Leidy & Thurman の解説は、この作品に15世紀という制作年代を与え、サキャ派もしくはシャル派の流れに属するとみなしている。解説文には VA や NPY、あるいはアバヤーカラグプタに対する言及はない。さらに、カーラチャクラの周囲の40のマンダラの中尊たちを、一番下の段にいる5尊と、それ以外の35尊に分けてしまい、35尊を「無上ヨーガの尊格たち」(the whole panoply of unexcelled Yoga tantra deities) と呼び、5尊をその隣のマハーカーラと毘沙門天と合わせて「7尊の護法尊たち」(seven protectors) と呼んでいる。これらがいずれも誤りであることはいうまでもない。

本作品の有する意義は、VA と NPY に説かれるマンダラの中尊たちを、その典拠にしたがって描いて配列した点にあるであろう。同じように二つの文献に依拠したチベットの絵画作品には、ゴル寺のマンダラ集や『五百尊図像集』があるが、いずれも、タントラの階梯にしたがってまったく異なる順序に変更されている⁽²¹⁾。VA などに忠実な順序の作品の存在は、現在のところ、この作品の他にはおそらく知られていない。ボストン美術館の「カーラチャクラ図」はその唯一の貴重な作例なのである⁽²²⁾。

制作年代や制作地については、なお検討の余地があるが、15世紀頃のツァン地方というのが、おそらく妥当なところであろう。保存状態の良好さ、描かれた内容の正統性、制作技術の水準の高さなどの点からも、本作品はチベット仏教絵画史上において、とくに注目すべき作品のひとつに数えられる。

註

- (1) 梶尾 (1986 : Pl. III10-1)、Leidy & Thurman (1997 : Pl. 29)。データはこれらの解説による。
- (2) VA については拙著 (1997) 参照。NPY は Bhattacharyya による校訂本 (1968) を使用した。「環の三部作」の用例は、たとえば Obermiller (1986 : 219) にある。
- (3) 拙稿 (1992) および拙著 (1997) 参照。
- (4) VA や NPY のマンダラの数え方については拙著 (1998) 参照。
- (5) ただし、Jackson (1996 : 82) はゴル派という様式名を乱用することに注意を促している。
- (6) カーラチャクラの尊容については田中 (1994 : 168-185)、Brauen (1998) 参照。
- (7) 梶尾 (1986 : III 9-6)。
- (8) 梶尾 (1986) の解説文による。
- (9) このうちプラティシュターに関しては拙稿 (2002) として発表を予定している。
- (10) Bhattacharyya (1972 : 40, 48)
- (11) Bhattacharyya (1972 : 18)
- (12) *Vajrāmṛtatantra*, TTP, No. 74, Vol. 3, 145. 3. 8 ff
- (13) Roerich (1976 : 1046)
- (14) *Jyotirmāñjarī*, TTP, No. 3963, Vol. 80, 160. 1. 2.
- (15) 羽田野 (1957)
- (16) たとえば梶尾 (1986 : Pl. III-9-5-7)。

- (17) 羽田野 (1957: 10)
- (18) この作品については、拙稿 (1998, 2001) 参照。
- (19) VA や NPY のマンダラの配列については拙稿 (1996) 参照。
- (20) Willson & Brauen (2000). 本書は単に『五百尊図像集』の図版出版にとどまらず、その典拠となる文献の翻訳、尊像の尊容集なども含み、チベット仏教図像学の進展に大きく寄与する研究である。
- (21) このほかにブロンズ像のセットが、北京の慈寧宮宝相楼にあったことが Clark (1937) 田中 (1985) によって知られている。ここでもおそらくタントラの改訂にしたがって全体のプランが考えられている。またミトラヨーギンの『アビサマヤムクターマーラー』に由来する白描集の中に、『ヴァジュラーヴァリー』のマンダラの中尊が含まれるが、おそらくこれは『五百尊図像集』を参照して描かれたものであろう。この白描集については拙稿 (1999) 参照。
- (22) 文献ではパンチェンラマ 1 世の *rDo rje phreng ba'i dkyil 'khor chen po bzhi bcu rtsa gnyis kyī sgrub thab, Rin chen dbang gi rgyal po'i phreng ba* (Pan chen blo bzang chos kyī rgyal mtshan 1973) が VA や NPY と同じ順序で 42 種のマンダラの観想法を説く。ただし『金剛甘露タントラ』の 3 マンダラの主尊の尊容は、この文献とも「カーラチャクラ図」は一致しない。

略号

NPY: *Niṣpannayogāvalī*.

TTP: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition. 『影印北京版西藏大藏經』鈴木学術財団。

VA: *Vajrāvalī-nāma-maṅḍalopāyikā*

文献

- 田中公明 1985 「慈寧宮宝相楼のブロンズ像立体曼荼羅セットの解析」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』7: 43-63。
- 田中公明 1994 『超密教時輪タントラ』東方出版。
- 梅尾祥瑞 1986 『チベット・ネパールの仏教絵画』臨川書店。
- 羽田野伯猷 1957 「Kāśmīra-mahāpañḍita Śākyaśrībhadrā——チベット近世仏教史・序説」『密教文化』21(5): 1-21。
- 森 雅秀 1992 「観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラ」『日本仏教学会年報』57: 73-90。
- 森 雅秀 1996 「『完成せるヨーガの環』の成立に関する一考察」『密教図像』15: 28-42。
- 森 雅秀 1997 『マンダラの密教儀礼』春秋社。
- 森 雅秀 1998 「ツインマーマン・コレクションの「ヴァジュラーヴァリー四曼荼羅」——チベットにおけるマンダラ伝承の一事例」『美術史』145: 64-81。
- 森 雅秀 1999 「ミトラヨーギン著『アビサマヤムクターマーラー』所説のマンダラ」『密教学研究』31: 55-88。
- 森 雅秀 2000 「解体されるマンダラ——タンカの画面構成に関する一考察」『加藤純章博士還暦記念論集』春秋社、pp. 373-386。
- 森 雅秀 2001 「『ヴァジュラーヴァリー』所説のマンダラ：尊名リストおよび配置図」『高野山大学密教文化研究所紀要』14: 1-117。
- Brauen, M. 1998 *The Mandala: Sacred Circle in Tibetan Buddhism* tr by M. Willson. Boston: Shambala
- Clark, Walter Eugene 1937 *Two Lamaistic Pantheons*. 2 vols. Harvard-Yenching Institute Monograph Series, vol III. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Grunwedel, Albert 1970 (1900) *Mythologie des Buddhismus* Osnabruck: Otto Zeller Verlag.
- Jackson, David P. 1996 *A History of Tibetan Painting* Wien. Verlag der Osterreichischen Akademie der Wissenschaften
- Leidy, D. P. & R. A. F. Thurman 1997 *Mandala: The Architecture of Enlightenment*. Boston: Shambhala.

- Lokesh Chandra 1986 *Buddhist Iconography of Tibet* Kyoto Rinsen Book Co Ltd
- Lokesh Chandra (ed.) 1971 *The Collected Works of Bu-ston* Part 26 (LA) . New Delhi International Academy of Indian Culture.
- Mori, M. 2002 The Installation Ceremony in Tantric Buddhism In S Einoo ed *Towards a Pratiṣṭhā* Delhi Manohar (forthcoming).
- Obermiller, E. 1986 (1932) *The History of Buddhism in India and Tibet by Bu-ston* Delhi · Sri Satguru Publications
- Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan 1973 *rDo rje phreng ba'i dkyil 'khor chen po bzhi bcu rtsa gnyis kyi sgrub thab, Rin chen dbang gi rgyal po'i phreng ba*. Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan gsung 'bum, Vol. 2 . New Delhi.
- Pander, Eugen 1890 *Das Pantheon des Tschangtscha Hutuktu* Berlin Verlag von W Spemann
- Roerich, George N. 1976 (1949) *The Blue Annals* Delhi : Motilal Banarsidass
- Tachikawa, M., M Mori & S Yamaguchi 1995 *Five Hundred Buddhist Deities*. Senri Ethnological Reports No. 2 Senri : National Museum of Ethnology.
- Willson, M & M Brauen eds. 2000 *Deities of Tibetan Buddhism The Zurich Paintings of the Icons Worthwhile to See* Somerville Wisdom

(平成13年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 「チベット仏教絵画の図像学的および様式史的研究」
(課題番号13610022) による研究成果の一部)